

島村眞智子 提出 学位申請論文（課程博士）

『中世的祭祀国家と脇能の成立』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文は、南北朝・室町前期の社会の諸事象から、観阿弥と世阿弥の青少年期という時期に、能が生成・創出されていった諸条件を多角的に考察したものである。特に、能の最初に演じられる、神が泰平を寿いで舞う脇能の成立とその背景、またその周縁部に焦点を充てている。その内容は、序章のあと、三編にわたり六章の論説を示し、最後に終章を収める。

序章は、論文全体の総論ともいべきもので、「世阿弥自筆能本」と「能楽大成期と世阿弥」の、二項目で考察を進める。まず、諸芸能の流動的状况の中で、都に進出してゆく大和申楽の位置を概括し、基本資料である世阿弥自筆本と伝書

が、芸能諸座との競合に打ち勝ち、観衆の獲得に繋がったこと。漢字カナ交じりの詞章は正確な発音と暗記によって習熟され、観衆に示されるとされ、これが当時の文学・宗教をはじめ、政治・社会を知る有効な史料になることを明示する。

第一編の「中世的祭祀国家の再編」は二章から成る。第一章「中世の時空と神々」の第一節「能の時空」では、世阿弥自筆本と世阿弥に關係の深い現行曲を通して、能に見る時空認識を検討する。それは、過去・異界と繋がる法力や験力の発動と祭祀の効果を確信し、神仏に対する信仰と魂の救済を祈願する強固な宗教的感情の存在を重視する。第二節「大外記中原氏注進」では、中原氏の『師守記』などの記録を基に、南北朝・室町初期の公事・公祭・祭祀に見られる特色を論じ、北朝朝廷の古儀復興の方針について分析を加える。その結果、先例を重んじた古儀復興が基本とされ、先例が確定していく院政期の前期・中期が復興のモデルにされていること、ここに回帰する意志が帰納的に形成されていたとする。第三節「光厳院葬送」では、北朝皇統の祖である光厳院の葬送儀礼について分析し、第

四節「師郷記の年中行事」では、中原師郷の日記を素材にした年中行事を分析し、さらに、第五節「足利將軍家と宮廷祭祀」において、宮廷の年中行事を通して室町中期に至る概観の考察を試み、その全体的見通しを得ている。第六節「神々の変容」では、北方で能を容認した有力な階層は武家であり、公家は無関心に近く、こうした能を容認しない朝廷の意識は反って、能の時空認識が、能を生んだ社会のなかで、どのように存在していたかを知る好材料であると理解する。そして、武家は産土神に育てられ、仏に宿命を知り、救いを求めつつ、戦いのなかで多くの神々に遭遇し、天下泰平・国家安全を神々に祈ったとする。將軍と武家が庇護した能は、武家が保有するはじめての、天下泰平・国家安全を祈る支配者の舞楽となった。能に見る時空認識と祈り、南北朝・室町初期の公事・公祭・祭祀にみられる特色との関連をまとめると、聖代への回帰と憧憬、祭祀の場としての内裏・洛中に象徴される聖別された時空認識、「穢」と「修羅」の現世認識、変容し多様化して人間に近づく神観念などが指摘できるとする。

第二章「神々と舞歌―院政期の舞歌と児」は、南北朝・室町初期の古儀復興の原点となる院政期・鎌倉初期の展開について、熊野御幸と『今昔物語集』を素材に論述がある。第一節「熊野御幸の祭儀と舞歌―『修明門院熊野御幸記』を中心に―」は、藤原頼資の記録『修明門院熊野御幸記』を通して、熊野信仰の実態を読み解く。熊野信仰と舞歌の特色は、熊野参詣という過酷な巡礼をともなう宗教的実践、熊野の神々と信者を仲介する修験者と陰陽師の介在、神仏が混在する巡礼祭儀、子孫におよぶ現世的所願成就の祈りなどを指摘する。生き難い無常の現実を生き抜く人々にとって、熊野は救済の手を差し伸べ、励ましの神託を与える大神が鎮まる地であり、この地に熱心に参詣をつづけた熊野御幸において先達となった修験者、御幸を浄め守護した陰陽師たちは、その後成立する能の中で、厳しい修行を勤め、神仏の加護を得た霊能者として生きつづいているとする。

第二節「『今昔物語集』の「児ちこ」と「童」では、平安末期の説話集『今昔物語集』に掲載される「児」およそ二二〇、「童」およそ二六五の用例を分析す

るほか、伊勢神宮はじめ神祇祭祀における幼いもの「物忌」についても論及し、聖別された幼い児を神のものとし、素朴で自然の力と不思議に神の形を見ている。

第二編「脇能の成立と奉幣使」のはじめに、大和申楽が京都に進出する経緯を『後愚昧記』を通して論じ、第一章「脇能と世阿弥」では、第一節「現行脇能」、第二節「大成期の能の作者と脇能」、第三節「世阿弥の伝書と脇の申楽」、第四節「世阿弥の伝書の「児」と「童」とつづき、脇能（脇の能）の成立の背景とその周縁を探る。第二章「北朝の奉幣使発遣」では、南北朝期に復興する奉幣について論じ、祭祀と能との繋がりでは、『申楽談義』に現れる大臣を演じる装束は、奉幣使の装束に学んだと推定する。

第三編「中世日本紀と能」は、近年研究の深化がみられる中世日本紀との関係に考察を進め、第一章「能から見る中世日本紀の展開」の第一節『日本書紀』講究」、第二節『古今和歌集』古注釈」、第三節「神仏習合と中世の芸能」、第四節「中世神道」の四節にわたって、研究史と神祇思想のテキストを素材に論議し、

中世日本紀をはじめとする古注釈・神道説と申楽能との直接の接点は確認できないと論じる。

第二章「中世の出雲信仰」では、第一節「観世弥次郎長俊と能『大社』」、第二節「『大社』と出雲の能・出雲関係の能」、第三節「出雲大社の遷宮と出雲の能」を取り上げ、大成期後期に展開する出雲の能について、中世的信仰を考究し、世阿弥の大成期初期との研究の見通しを得る試みとしている。

最後には、終章「神々の変容と脇能」を配し、全体の総括として、能は武家が保有する初めての、天下泰平・国土安穩を祈念する支配者の舞楽であると定義する。また、世阿弥と脇能を考察する中で、伝書と能本から見える、世阿弥の内なる方向や当時の置かれた状況だけでは、武家に能が受け入れられた理由が明らかにできない限界を持っていることも指摘する。

本論文の題目にある「中世的祭祀国家」とは何か。「中世的祭祀国家」とは、南北朝・室町初期の騒乱のなかで、試行錯誤のうちに形成されていった北方の古

儀復活と、それを支持し軍事的に擁護する足利將軍と武家が、次第に治者としての祭祀を自覚し、みずから宋に学んで五山十刹を創建し、神祇と仏への信仰を祭祀機構の中に組み入れ構築してゆく体制を仮称したものである、と説明する。

論文審査の結果の要旨

本論文は、題名にもあるとおり、「中世的祭祀国家」と「協能の成立」という二つの研究の志向性が交錯するなかで、新たな舞歌として創成された協能と世阿弥に視点を合わせ、論述を深めようとしたものである。

「中世的祭祀国家」のカタチを示すものとして、南北朝期・室町初期の『園太暦』『師守記』などの諸記録を素材に、当時の公事・公祭など祭祀・儀礼を取り巻く状況を実証的歴史研究の方法により論述が立てられていく。

「中世的祭祀国家の再編」で具体事例として挙げられているのは、南北朝・室

町初期の公事・公祭・祭祀に見られる特色である。北朝朝廷では、勘引された先例による公事・公祭・祭祀の復元と再編が行われ、もつとも古い先例を遡って復興されたと論じる。後醍醐天皇撰の『建武年中行事』に象徴的に示される年中行事・儀礼の催行が国家を統治し皇統の正統性の証であるとする意識が強く表われたとする。その一方では、戦乱や触穢により公事・公祭の延引・停止は常態化していった。春日神木、日吉・東大寺八幡・石清水八幡神輿の上洛により、公家側の対応は攪乱され、公事・公祭への藤原氏上卿の不参がつづく事態も出来た。武家側は公事・公祭の経済的負担に応じ、神木・神輿の上洛に対処した軍事的布陣を行い、公事・公祭の円滑な執行に協賛することになる。こうした「試行錯誤」の状況の中から、協能の創成を見出そうとする新しい視点を示している。

こうした南北朝期・室町初期の社会の動向に照らして、祭祀・儀礼を取り込んだ政治体制が築かれていくなかで、能に見える時空意識が確定してゆくという。能は遊歴する修験者・出家者・巫女などの祭祀者や天皇と臣下によって、夢幻の

中に、神仏・靈鬼が出現する過去の奇跡の時に救済を求め、能に現れた宗教的帰依は、宮廷の祭祀を擁護したと論じ、ここに聖代への回帰と憧憬とがあったという。能に見る時空認識と祈りとは、その時代性と宗教性に依拠したもので、ここが本論文の中枢になっており、歴史性と文学性、現実と夢幻とが交錯する世界を想定している。

また、能では人間がこの世で、時空を超越する力を持つことができる存在とされ、自然の神秘のなかで自身の靈力を高め、神仏に通じる祈念の力を合わせて、その不思議を奇跡とし、みずからのものとして実現できると信じられたことに関心を寄せる。この時代の人間性に満ちた真情は、現実世界で人間が時空を超越した力を得ることができると考え、祈りと精進、神仏への信仰を捧げた普遍的な中世の姿を示していると論じる。これらは南北朝期・室町初期の政治史と宗教・神祇信仰史を視野に入れた幅広い論議から帰納的に論述が組み立てられており、ここに本論文の一つの特色が認められる。

右の論点の原型を求める試行として、第二章では「神々と舞歌」を収める。ここでは、院政期・鎌倉初期の舞歌を熊野御幸に求め、熊野に巡礼し舞歌を捧げる人々を迎えた高遠な神慮について触れ、こうした熊野に象徴される、中世の神々と信仰とを伝える記録を読み解くことで、能の形成・源流の背景としたこと。この熊野信仰は、二世紀の後にも、遠い陸奥国名取の地へ広がり、能の『護法』と成って、強靱な生命力を保ちつづけており、中世熊野信仰の特質を論じることなど、能の創成の周縁を際立たせている。さらに、『今昔物語集』を取り上げ、聖別された幼い児を神のものとし、素朴で自然の力と不思議に神の形を見ていることは、能の形成の背景に迫る有効な見解といえる。

こうした脇能の創成の周縁を補強しつつ、その本論に迫ろうとしたのが、第三編の中世日本紀と中世出雲信仰についての論述である。その意図は明確であるが、変容する神々をテキスト化した中世日本紀については、いま研究が深化している部分であり、本論文では十分な論議が尽されているとはいえない。本論文におい

て、中世日本紀と能の創成に直接の関係はないと論じるが、必ずしも論点が煮詰まっているとは言えない。今後更なる検討が必要であろう。中世出雲信仰との関係は、出雲中世の諸事象を組み込んだ論議を進めており、能のその後の展開の一類型を知る上でも重要な論考であり、本論文の最後、締め括りに置かれていることは、全体の論調を引き締める上で効果を上げていると思われる。

論文提出者は、長年にわたり能の研究に取り組まれてこられた。その研究の原点は、世阿弥にとって能は神楽であり、神仏に捧げる天下泰平・国土安全の舞楽であり、身分の外にある芸能の民が、なぜ、天下泰平・国土安全をテーマとする舞を舞い、夢幻のなかに生き続けたのか、を問い続けてきた。この問いに答えて、当該期の社会の諸事象に照らして、信仰と祭祀のあり方を考察し、研究成果を上げられたのが本論文である。

なお、南北朝期の政治動向や中世日本紀の検討では、論議が不十分なところもある。また、その文体は文学的表現と歴史的論証の間で交錯する複雑さを持ち、

論文提出者の思い入れが深く、独特の文章表現が多用されるなど、問題点も幾つか認められることは、今後の課題となろう。

以上のとおり、本論文は南北朝期・室町初期における脇能の成立を、多角的に論じた研究であり、この分野の研究の成果として認められる。

よって、本論文の提出者島村眞智子は、博士（宗教学）の学位を授与せられる資格を備えているものと認められる。

平成二十五年二月十五日

主査	國學院大學教授	岡田 莊司	印
副査	國學院大學教授	中西 正幸	印
副査	國學院大學教授	千々和 到	印